

受賞のことば

琉球王国の「大航海時代」

九州大学准教授 中島 楽章

室町時代の海外貿易といえば、一般にはまず明朝との朝貢貿易が思いかぶだろう。しかし実際には、15世紀初期・中期の一時期をのぞけば、中国や東南アジアの産物は、大半が琉球王国の中継貿易によって日本に運ばれていた。また1543年にポルトガル人が種子島に来航したことは、誰もが知っている。しかしその前年に、やはりポルトガル人が華人商船に同乗して琉球に漂着していたことは、ほとんど知られていない。さらにコロンブスが伝説の黄金島ジパングを求めて大西洋を横断し、アメリカに到達したこともよく知られている。一方、マゼランの太平洋横断の主要目的地の1つが琉球(レキオス)だったという説は、百年以上前にフランスの学者が提唱して以来、ほぼ忘れられている。

本書ではこれらの問題も含めて、15・16世紀における琉球王国の海外貿易の全体像を、近年の琉球史研究でも十分に利用されていない、イベリア史料を利用して描きだすことを試みた。琉球王国の海外貿易については、中国・朝鮮・東南アジアとの漢文外交文書を集成した、『歴代宝案』という海域アジア史でも屈指の史料が存在する。しかし『歴代宝案』でも琉球船の交易活動の実態に関する情報は乏しく、公的通航の枠外で行われた密貿易や、漢文文書による通航の対象外だった地域との交易については、なんら語ることがない。

それを補うのが、16世紀に海域アジアに来航したポルトガル人・スペイン人などが残した史料や古地図である。彼らは海域アジア東端の通商国家であった琉球に強い関心を示し、その航海・交易活動の実態についてさまざまな記録を残した。そこでは琉球の朝貢貿易が長期低落傾向にあった15世紀末以降も、福建海商との密貿易は拡大していたこと、琉球船が『歴代宝案』に記された国々だけでなく、広東・ベトナム・フィリピン・ブルネイなど、南シナ海全域で広範な交易活動を行っていたことなどが活写されている。

本書ではこれらのイベリア史料を中心に、『歴代宝案』などの漢文史料や考古学研究成果も利用して、琉球王国の貿易活動の実態に多角的にアプローチすることをめざした。大航海時代の航海者・交易者たちの証言が、琉球史・海域アジア史に関心のある多くの人々に、より広く知られることを願っている。

なかじま がくしょう

1987年早稲田大卒、99年同大より博士号(文学)取得。2000年九州大大学院人文科学研究院助教授、07年より同准教授。64年生まれ。

